2015.12.15

博物館 Dictionary No.185

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

新春特集陳列　さるづくし　―干支を愛でる―

十二支の話
―申―

みなさんは自分の生まれた年の干支が何なのか知っていますか。あるいは、平成28年（2016）は何の年でしょうか。下から選んでみてください。

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥――。

呪文のようで驚きましたか。みなさんは「ね、うし、とら…」から始まる、十二支と呼ばれる動物たちのことを思い浮かべたかもしれませんね。もちろん、それで正解です。上の漢字も、「ね、うし、とら…」と読んでも間違いではありません。ただし、十二支とは、もともと動物を意味したわけではなく、時刻や方角を12に分けて表す単位のことだったのです。

また、十二支の漢字は、十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）と組み合わせて、年や月日も示すことができます。たとえば西暦672年に起きた「壬申の乱」というのも、これから名づけられました。また、陰陽道と結びついて占いにも活用されています。この十干十二支を略して、「干支」というのです。中国での成立はおそらく紀元前までさかのぼり、日本にも5～6世紀ころには伝わっていました。江戸時代までは人々の暮らしを定める基本的な単位として用いられ、現代でも多くの文化にその名残をとどめています（土用の丑の日に鰻を食べるという家は多いでしょう）。

しかし、暦や方角を表す呪文のような12の漢字を、小さな子どもや、文字を読めない人が理解できないのは、たいへん不便です。そんな人たちにもわかりやすいように、5～6世紀ころの中国で、それぞれの漢字に動物を当てはめるようになったと考えられています。それが、みなさんもよく知る12種類の動物です。

鼠（子）、牛（丑）、虎（寅）、兎（卯）、龍（辰）、蛇（巳）、馬（午）、羊（未）、猿（申）、鶏（酉）、犬（戌）、猪（亥）――。

暦や方角を示す十二支の動物は、時間や空間を司る霊的な能力をもった獣として崇められるようになり、大きな墓などに

図1《十二支像護石拓本》京都国立博物館蔵

絵や彫刻が飾られました。初めのころはただの動物の姿で表されていたようですが、やがて動物の頭で人間の体をもつ“獣頭人身”の姿で形づくられるようになります。

奈良県明日香村のキトラ古墳（7～8世紀）からは、動物の頭で衣服を着る十二支を描いた壁画が発見されました。同じような十二支像は、たとえば韓国の古墳にもみられ、東アジア全体に信仰が広がっていたようです。

さて、平成28年（2016）は申（猿）年です。ここで時代も国も異なる“獣頭人身”の猿をふたつ見てみましょう。

図1は、新羅（古代朝鮮の王国）の将軍金庾信を埋葬したお墓の周囲に配置されていた石板の拓本（紙や絹をあて、その上から墨を打ち、文字や絵を写し取ったもの）です。そこには、十二支の像が彫られていました。猿は、胸を張ってまっすぐ、勇ましい姿で立っています。衣はゆらゆらと翻り、人智を越えたエネルギーがあふれているようです。新羅のお墓に表された十二支は、その場所を守護する役割を担っていたようなので、このような頼もしい姿が求められたのでしょう。

図2　重要文化財《十二類絵巻》（部分）　個人蔵

左の図2は、日本の室町時代、15世紀の絵巻物に描かれた猿です。この場面は、十二支の動物たちが和歌の会を終えて宴を催しているところ。扇を持って、体をグニャグニャと曲げて舞いおどり、リラックスして陽気な気分です。顔が赤いので酔っぱらった人間のようにも見え、とても身近な感じがします。

同じ“獣頭人身”の猿でも、まったく印象が異なりますね。もちろん、時代が違うふたつの絵だけを見比べても、猿や十二支に対する考え方に新羅と日本でどのような違いがあったのかはわかりません。ただ、どうやら朝鮮半島には、昔から猿が生息していなかったようなのです。だとすれば、おそらく中国から伝わった文化に影響を受けて、ほとんど見たことのない猿の絵や像をつくっていたのでしょう。それに対して、日本人は昔から暮らしの中でニホンザルと親しく触れ合ってきました。絵巻物の中で愉快に踊る猿の表現には、そうした経験が活かされているのかもしれません。

（美術室　井並林太郎）

印刷・富士印刷社